

国際教養学部教員が多数オープン・カレッジに関わっている点は、学部としてもまた学部を超えた全学レベルでも特記に値する。以下、やや遠回りに、この点について考える。

あるイギリスの作家名を冠する日本の学会でのこと。その会は大学関係者のみならず、たとえば証券会社を退職した方なども気楽に参加されている。その方が、作家のある自伝的作品と同時代の株価との関係について発表され、好評をばくした。作品の主人公の人生の浮沈と株価との関係を論じたのだ。株価の上下は単にグラフで示されるというものではなく、二十世紀のかなりの期間をロシア革命など当時の歴史的事実に照らして分析の上、最後に作品内容に着地するというものであったので、聴衆の視界はひろがった。

ある院生が質問した。自分は数字にはうとい。どうしたら数字に慣れることができるのか、と。その質問の仕方には、自分は文学が専門だ、数字とは無縁の世界にいるといった態度さえ見え、聴衆の反応は複雑であった。そうだ、数字は無縁だということから、かれはこれからどうやって住宅ローンの計算をしていくのであろうかというもので、さまざまな反応があったことは、あとの懇親会で推察できた。

当の発表者は淡々と答えた。会社に入れば、毎日が数字とのにらめっこ。得手不得手関係なく日々が過ぎていく。おのずと数字に慣れていく。

国際教養学部が教養部であったころ、受講者数とか偏差値といった数字に対する配慮は少なくとも現在より希薄であったように思う。

そこで、数字や受講者の満足度という点をめぐり、少しは自分を鍛えておかなければと考へ、手をつけたのがエクステンション・センターのオープン・カレッジであった。英語という科目の関係上、高校、短大、大学ですでに十分に学んだ受講生が多いので、ただ英語では成り立たなく、翻訳という作業を行うことにした。受講生の背景はまちまちだった。三十歳から七十歳近くの方までおいでなので、親子の違いがある。それはそのままそれぞれの訳語に反映し、ひとつの言葉をめぐる解釈が年代で分かれることもあった。講師としてはどちらも正解とし、翻訳も古典など多くの人の目に触れるものは時代によって訳し変える必要もある、というような話にもっていった。正解があるといっても受講者の人数分の訳文が出て来る翻訳講座では、そうした柔軟な対応をとる以外に方法を思いつかなかった。受講生は実によくできたし、予習も完璧なので、こちらの準備は授業時間の数倍になった。途中からインターネットが普及し、朝から晩まで質問が来るようになった。講座が終わるとこれが解放ということかと実感した。ある方の言葉が思い浮かんだ。その人が著書を出したときのこと。本を書くのはたいへんだと言ったところ、そんなことはない、翻訳のほうが大変だよ、翻訳はわからないところも訳さなければならない、本はわからないことは書かないからね。

オープン・カレッジを経験してからの学部の授業はどのように見えたか？授業観は劇的に変化した。オープン・カレッジを担当する際の内容と受講者数などいくつもの注意点に比べれば、学部の授業の注意点は数えることができる。侮っているのではない。まったく違う世界ということだ。

親しく接することができるようになった若手の教員に、一度はこの話をするにしている。ただしここに足をとられ研究が進まないともこれも困ると付言した上で。